

# 現代アート作家との出会いを通じた実践についての一考察

中 田 稔

美作大学・美作大学短期大学部紀要（通巻第53号抜刷）

報告・資料

## 現代アート作家との出会いを通じた実践についての一考察

A Study on the Application Through an Encounter with a Modern Artist

中 田 稔

キーワード：図画工作、造形遊び、現代アート、ランドアート、5・6年生

### 1 はじめに

本稿は、現行の学習指導要領をもとに展開される図画工作科の授業で生じた課題を踏まえ、小学校5・6年生が、現代アート作家と共に行ってきた授業の経過と、現段階までの成果と課題を報告するものである。

1998年12月に改訂された学習指導要領において、図画工作科の教科内容では、改善の要点として「ア 内容の関連と2学年を見通した弾力的な指導」「イ 鑑賞の指導の充実」「ウ 工作の指導に充てる授業時数の確保」の3点を挙げている。この3点を総合的に考えると、指導内容を関連づけて題材を精選しながら、鑑賞や工作の時間は充実させるという、かなり高度なカリキュラム編成を各学校や教師一人一人に課している。また、図画工作科の年間標準授業時数を、1年生68時間、2年生70時間、3・4年生60時間、5・6年生50時間と定め、3・4年生で10時間、5・6年生で20時間の時間数が削減された。これによって、週あたりの時間数は、1・2年生2時間、3・4年生1.7時間、5・6年生1.4時間となり、2時間続きでゆとりをもって表現活動に臨む事が困難となり、各学校では、図画工作科の「ある週」と「ない週」など、複数の時間割を作るなどして対応せざるを得ない状況が生まれた。さらに、内容の精選や時間数の削減という方向と矛盾するように、5・6年生にも「造形遊び」\*<sup>1)</sup>が導入されたことによって、図画工作科の指導に混乱や停滞を招いたと考えられる。

おそらく、文部省(当時)の意図としては、「造形遊び」の全学年での導入は、ただの1領域や1内容としての導入ではなく、教科全体の理念を確立するためのものであったのであろう。図画工作科を文字通り、図画+工作の教科と捉えるのではなく、多様で創造的な表現を促す観点から「造形遊び」の理念を教科全体の理念としてとらえて、題材の関連と精選を行うとともに、子どもの遊び性を生かしながら指導にあたるという意図での「造形遊び」の導入と考えられる。

しかし、実際の小学校現場の多くの教員には、このような理念や意図が十分に理解されず、子ども一人一人のよさを認めるという理念に反して、特に5・6年生での「造形遊び」は、「時間や場所がない」とか「指導しにくい」という理由で敬遠されたり、「遊び」という言葉の取り違いによって、教師の指導のない、自由気ままな活動に終始してしまっている例が見られる)。\*<sup>2)</sup>

そこで、本研究では、小学校5・6年生に焦点を絞り、「造形遊び」の理念をもとに、改善の要点として挙げられた「内容の関連」や「鑑賞指導の充実」を図り、さらには中学校との連携をも視野に入れて取り組むための一方策として、積極的に現代アート作家と関わる図画工作科の授業を構想し、実践することとした。

### 2 実践に向けて

戦後の美術教育の一大潮流として、もともと子ども

には美的本能が備わっており、子どもの表現はその先天的な創造性への外に向かったの表出であるから、その自由な創造的表現を保証するために、大人の側のあらゆる抑圧から子どもを解放してやらねばならないとする創造主義の美術教育観がある。つまり、子どもは内から外へ発達していくという考えであり、大人の芸術から子どもを遠ざけようとする思考である。「造形遊び」についても、その誕生期には1960年代の現代美術が、深く関わっていたということが、近年多くの研究者によって指摘されている。<sup>\*3)</sup>しかし、「造形遊び」が学習指導要領に位置付き、制度として整備される中で、「子ども中心」の思考の中、その誕生に大きな影響を与えたはずの現代アートとの接点は、意識的に遠ざけられた感がある。

けれども、「二つ目の横顔の発生率」を通してB・ウィルソンが子どもの先天的な創造性を否定したように、子どもは時代の文化や環境の相違など、社会的影響を強く受けて創造力を身につけるものである。それ故、大人の芸術から子どもを遠ざけるのではなく、むしろ大人が豊かな芸術的環境を整えてやるのが肝心であろう。また、米国DBAE(Discipline Based Art Education)の推進者であるE・W・アイスナーは、J・デュエイの『経験としての美術』を引用しながら「人々の多くは、芸術を感情的発散のはげ口とみなしている。(略)要するに、芸術を知性から分離し、思考を感情から分離するといった傾向は、美術教育にとって障害となる源の一つだったのである。そうした考えは、芸術あるいは教育の両方を正当に扱っていない。芸術家たちは、深く感じたり、また内的な思考や感情さらにイメージといったものをある外的な形態に変えることができるような思考力豊かな人々である。」と述べている。<sup>\*4)</sup>

このような観点から、多感な思春期を迎える年齢の子どもたちが、一人の人間としてのアーティストに出会い、その思考や表現に触れることは、情操面のみならず、知的な教育活動としても、その意義が深いと考える。特に、現代アート作家は、現代社会が抱える問題や、地域という場所から地球全体を見通した自然へのこだ

わりなど、それぞれのテーマとそれに対する独自の表現方法を持って作品を生み出しており、同時代や同地域で生きる子どもたちの目から見ても、共感を得やすいと考える。つまり、アーティストと出会うことは、単にその技法を真似るといような表面的なものではなく、その人の生き方や考え方を通した、もっと深い部分での学びであり、知的な活動なのである。また、「鑑賞の充実」という改善の観点からも、作品の鑑賞に止まらず、それを生み出す作家自身を知って鑑賞することは、子どもたちの造形体験にとって、大変有意義であると言える。

そこで、具体的な授業プランを考える前提として問題となる5・6年生の図画工作科の授業時数については、「総合的な学習の時間」と関連させて時間数を確保することにより賄うことにする。そして、「造形遊び」の理念を生かしながら、総合造形的な方向で実践することにした。そのため、できるだけ地域の人材をゲストティーチャーとして活用するような授業を考え、その人選を進めた。ただ、現代アートと言ってもその範囲は広く、表現方法や取り上げるテーマも多種多様である。学校という教育機関、しかも小学生を対象とする中で、受け入れられる現代アートを吟味しなければならない。

この度の実践では、鳥取市のS小学校に依頼をし、5年生(平成18年度当時)2クラス合同での授業として承諾を得た。さらに、現代アート作家については、1999年より鳥取県岩美町の海岸近くにアトリエを構え、鳥取の自然と歴史、或いは大陸文化との関係を意識した国際的な制作活動を行っている大久保英治(1944-)に依頼することにした。大久保は、1980年代前半より、「時間」や「場所」の持つ意味などをテーマに自然と関わり、自然と一体化した制作や活動を精力的に続けている日本を代表するランドアート作家である。大久保のテーマとする地域の自然環境や歴史、あるいは、その自然物を中心とした表現方法は、数ある現代アートの中でも学校現場で受け入れられやすい活動のひとつであると考えられる。

大久保にも承諾を得た後、事前の話し合いの中で、

単発的な取り組みではなく、同一対象者で、少なくとも1年間を通した長期的な取り組みにすることや、自分たちの住む地域や、季節感を意識した表現に力点を置くことなどの提案があり、それらをもとに全体の授業プランづくりを行った。

そして、本年2月鳥取県の山間にあるS小学校の5年生2クラス47名を対象に、初めての出会いの授業を行った。この実践の詳細については、本学『地域生活科学研究所所報第4号』に掲載している。

### 3 実践の概要

2月の出会いの授業後3ヶ月が経過し、対象者が6年生になってから、春をテーマに2回目の授業を行い、さらに、夏と晩秋に1回ずつ計3回の授業を行った。その授業について、以下に概要を述べる。

#### 第2回

テーマ 「春の色と私と友だち」

実施日時 5月9日（水）午前 9:00～11:30

場所 鳥取市立S小学校図工室及び校庭周辺

活動のねらい

- ・季節を表す色や形があることを知り、野外で見つけた春の自然物と自分や友だちがイメージする春の色を組み合わせて表現する。

主な活動の流れ

- ①春のイメージを身体で表現する。
- ②春を表す色をイメージし、その色で画用紙を色鉛筆やクレパスで彩色する。(写真1)



写真1 画用紙の彩色

- ③友だちと二人組で野外に出て、彩色した画用紙に合う春の自然物を見つける。
- ④二人でお互いの思いを出し合い、春の色と自然物との調和や意味を考えながら、立体的に表す。
- ⑤できた作品(写真2)を鑑賞する。

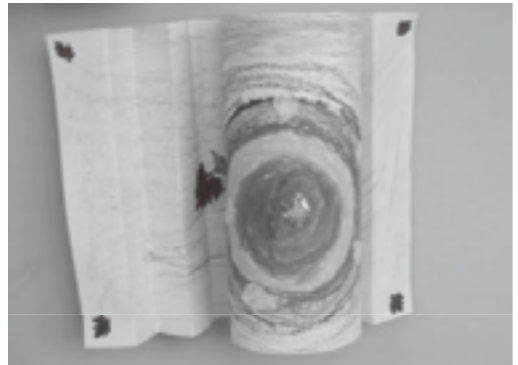


写真2 作品例

感想(抜粋)

- ・春の色と自分の気持ちを表すのは、すごく楽しかったし、2つの作品を1つにしたことが今までなかったの、こんなやり方もあるのかと思いました。
- ・春の色はいっぱいあって、人それぞれちがうからひとつじゃないんだってことがわかりました。
- ・外から草や花をとってきて自分の作品にくっつけて作品をつくっていくのがすごく楽しかったし、いろいろなことを考えてつくるのが楽しかったです。

#### 第3回

テーマ 「私と夏の時と場所」

実施日時 7月20日（金）午前 9:25～12:00

場所 鳥取市立S小学校理科室及び図工室

活動のねらい

- ・夏という季節を感じながら、現在や過去の時間を意識し、今ここにいる自分を色や形で表現する。

主な活動の流れ

- ①作家の作品や活動をスライドで鑑賞する。
- ②2月と5月の作家との学習中に画用紙に記録した

字や絵を、今の時をイメージした夏の色で塗り込み、消していく。

- ③彩色した画用紙を箱形に組み立てる。(写真3)
- ④夏休み中に自分だけの宝物を見つけて、箱の中に入れて固定する。(写真4)
- ⑤段ボールを切って、宝物を見つけた日の新聞を貼り、その上に箱を固定する。



写真3 箱をつくる

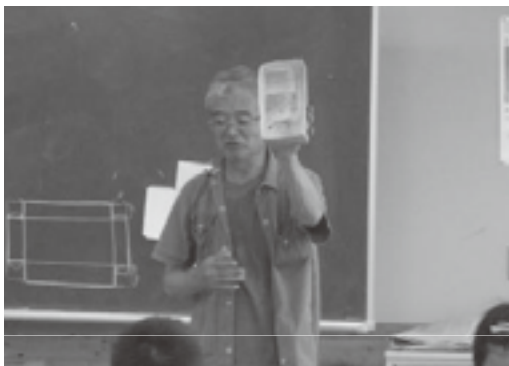


写真4 夏休み中の課題を指示

#### 第4回

テーマ 「秋から冬への季節の便り」

実施日時 11月22日(木) 午前 9:25 ~ 12:00

場所 鳥取市立S小学校理科室、図工室、校庭  
周辺

#### 活動のねらい

- ・秋から冬へ向かう季節の移り変わりを、伝える相手を意識しながら写真に撮って表現する。

#### 主な活動の流れ

- ①作家の作品や活動をスライドで鑑賞する。
- ②秋から初冬の季節を感じさせるものを野外で探して、それをういて作品をつくる。
- ③つくった作品をデジタルカメラで撮影する。(写真5)
- ④プリントアウトした写真を西洋紙の片側に貼り、ポストカードをイメージしながら、もう一方に、葉っぱを使ったフロッタージュをする。(写真6)
- ⑤できた作品を鑑賞する。



写真5 デジタルカメラでの撮影



写真6 作品例

#### 感想(抜粋)

- ・一番難しかったことは、材料を集めることと、写真をとることです。どんな角度にすればいいかなやんだし、風がとても強かったので、作品がとんだりして大変でした。でもきれいにとれたのでう



れしかったです。

- ・やっぱり自然をたくさん生かせばすばらしい作品ができるんだなと思いました。
- ・作品は、木の枝にもみじと葉っぱをさした作品で、ちょっとだけ自信のある作品でした。写真でプリントアウトをしてみたら、とてもきれいにうつってうれしかったです。あと、大久保英治さんや校長先生などの人にほめられたことが一番うれしかったです。

#### 4 成果と課題

5年生での出会いから現段階で4回の授業を行ってきた。卒業前にと1回、今までの授業のまとめとして、子どもたちの手による作品展を企画しているが、ここまでの実践についての成果と課題について、以下に考察する。

##### (1) 作家によって具体化された学習指導要領の内容

学習指導要領では、5・6年生の「造形遊び」について「ア 材料や場所の特徴をもとに発想し、よさや美しさなどを考え、想像力や創造的な技能などを総合的に働かせて楽しく表現すること。」「イ 材料や場所などに進んでかかわり合い、それらをもとに構成したり、つくるものと周囲の様子を考え合わせて表しながら造形遊びをすること。」と、内容について2つの事項が表記されている。1・2年生からの「造形遊び」のこの事項を、系統的に見ていくと、5・6年生の「造形遊び」で重視されることは、「場の特徴と周囲との調和を総合的に表現する」という点である。そしてこれは、まさに大久保が、自身の作品で度々表現していることである。特に、「総合的に表現する」という点に関して、「児童は、それまでの造形体験で働かせた想像力や技能、感じ取る力などを、関連付けたり応用したりして、創造表現の能力などを高める」\*<sup>5)</sup> ことが、総合的な表現能力と説明されているが、この説明だけでは、なかなか具体的な授業の姿をイメージすることができない。しかし、この実践を通じて、大久保がアーティストとして子どもたちに伝えようとしていた

「創造表現の能力を高める」ことは、「自分自身が、今生きている時間と空間、そしてその土地の歴史や文化との関わりをどう感じ、どう表すか」を焦点とした問いかけの連続であり、特に、時間という軸を意識的に教材の中に組み込んだことが印象的であった。子どもたちの感想の中にも、「時間という言葉が印象に残りました。時間が過ぎれば消えていくもの（影）といつまでも残る物の話が私は好きでした。」と書いている者もいた。1回目の出会いの授業から自らの制作活動の紹介（写真7）などを通して、一貫して時間という概念を意識させた大久保の、アーティストとしてのメッセージが、子どもたちに素直に伝わったことの表れであり、それによって、「総合的に表現する」というイメージが子どもたちの表現に形として表れたと言えるであろう。



写真7 大久保英治による作品  
「森の刻<sup>とき</sup>— Neddernhof 2000-2004」\*<sup>6)</sup> (ドイツ)

##### (2) 自然や表現材料に対する意識の変容

大久保の手がけるランドアート、或いはアースワークとも呼ばれるアートは、1970年前後にアメリカやイギリスに登場し、大地や自然を対象として、そこに痕跡を残すことによって作品に表すアートである。アメリカの作家の手法が、土木工事のように大規模でメカニカルなものであるのに比べて、イギリスの作家の作品は、作家自身の手を駆使して表現されるものが多い。大久保の作品は、明らかに自然と対立する前者の手法には属さず、身近な自然材料を中心にして、時に

繊細な手仕事で自然との融和を奏で、日本人の精神性をも醸し出している。このように、ランドアート作家であっても、各個人の自然に対する向き合い方によって、その表現方法は異なるが、自分自身が拠って立つ場の自然や歴史を重視し、そこに人の痕跡を繊細に残すという大久保のアートは、子どもたちを対象に、教室を舞台としたこの度の実践には、非常に適していた。子どもたちからも、「自然のもので、いろいろなものがつくれることを知った。」「自然に対する気持ちが変わった。」というような感想が多く寄せられた。

また、事前と、第4回終了時に行ったアンケート調査の中で、「あなたは、自然のものでつくるような図工の授業は好きですか、きらいですか。」という項目に対しては、回答に以下のような変容が見られた。

調査対象 鳥取市立S小学校6年生(1回目は5年時) 児童47名  
 調査日 1回目 2007年2月13日  
 2回目 2007年11月27日

「自然のものでつくる図工について」	(%)	
	1回目	2回目
ア 好き	42.6	25.0
イ どちらかといえば好き	8.5	52.3
ウ どちらでもない	34.0	15.9
エ どちらかといえば嫌い	8.5	4.5
オ 嫌い	6.4	2.3

この調査結果によると、本実践の後の方が「ア 好き」と答えた子どもが減っている点が、多くの子どもの感想の中の記述と相反するように感じるが、「ア」と「イ」を合計した数値は、1回目では、51.1%であるのに対し、2回目は77.3%と、26.2ポイントもアップしている。また、1回目では34.0%いた「ウ どちらでもない」と答えている子どもが半減している。この結果から、この実践を行うまでに子どもたちは、自然材で表現するというような活動の経験が少なく、イメージで判断したり、或いは経験がないために判断できなかったと考えられる。そして、実際に大久保との

活動を通して、自然材を扱うことの難しさと楽しさを知り、実感を伴った評価が数字として表れたものと考察する。

### (3) 造形行為に対する再認識と系統化の課題

この度の実践のきっかけは、前述したように、小学校5・6年生に導入された「造形遊び」が、その理念に反して教育現場では十分に受け入れられていない実態に対して、現代アートの手法を取り入れることにより、その解決の糸口を探ることにあった。

大久保は、小学校の「造形遊び」の内容を把握しているわけではない。最初の授業では、石を並べる、積むなどの1・2年生の「造形遊び」の操作活動からスタートした。しかし、この活動は、子どもたちにとって決して幼稚でつまらない活動ではなく、むしろ非常に新鮮で、知的なものであった。夢中になって石を積んだり並べたりする中で、「大きい順に並べてごらん。」という大久保の発する一見単純な指示が、子どもたち自身の判断力が存分に試される場面となった。ある子どもは、横幅の大きさを規準に石を並べ、またある子どもは、高さを規準に、また他の子どもは重さの順に並べていた。さらに、自分が拾ってきた石を5個積むという活動も、石の形状を目だけではなく手触りなども駆使して判断して、どの順番にどのようなバランスで積みよいかを決めなくてはならない。思いのままに積むだけではなく、高学年らしい知的なこだわりや造形的な判断力を大いに働かせて活動している様子が見られた。

このように斬新な発想は、アーティストとしての長年のキャリアから生み出されるものであり、教師の力では教材として発想しにくいものである。

また、同じ造形行為であっても、アーティストの表現には、作品に対する強い意図や主張がある。構成的な美しさ、緻密さを伴う完成度の高さや、空間を意識した巨大さや莫大な物量による表現は、決して子どもには真似のできないものである。時に圧倒的な本物の凄さや美しさを子どもに見せ、自らの表現との違いを体感させることができるのは、大久保のような国際的な

アーティストならではのものであろう。(写真8)

この度の実践から5・6年生の「造形遊び」の題材のヒントを多く得ることもできたが、まだこれらの造形行為の系統性を精査したわけではない。一般的な教師のレベルでどのような授業実践ができるかは、今後の課題としたい。



写真 8

大久保英治による作品

「環流－Nied Erlausitz」\*7)  
(Europa-Biennele1993)

## 5 おわりに

今回の実践を通して、子どもたちの感想や言葉から、想像以上に子どもとアート作家とのコミュニケーションが円滑に行われたことを感じた。子どもたちは、大久保との活動を楽しみ、アーティストとしての姿に尊敬の念を抱き、人としての大久保英治の魅力に惹かれていった。また、大久保自身も子どもたちの素直な表現の素晴らしさに心から賞賛の言葉を贈っていた。子どもたちにとっても、作家にとってもこの度の出会いが、深く記憶に残る出会いとなった。是非、最後のまとめの作品展を、もっと多くの人々の心に残る素晴らしいものにし、図工・美術教育の大切さをアピールしたいものである。

## 謝 辞

本研究を行うにあたり、ご協力下さいました鳥取市立S小学校の皆様と、ランドアート作家大久保英治氏に厚くお礼を申し上げます。

## 註及び引用・参考文献

- 1) 「造形遊び」は、昭和52年に「造形的な遊び」として小学校1・2年に初めて登場した。以来30年を経た現在では、「材料などをもとにした楽しい造形活動」として小学校全学年共通の図画工作科の内容領域となった活動である。本稿では、「造形遊び」と表記する。
- 2) 美術教育学会誌第27号に掲載の西村隆司の論文「小学校教員の専門性と美術教育研究の方向性について」などで、教師の「造形遊び」に対する理解度や実態が語られている。
- 3) 2006年12月13日に大阪教育大学天王寺キャンパスにて行われた、美術科教育学会第12回西地区会で、「“三十歳” 目の造形遊びを磨く」というテーマで討議が行われた中で、「造形遊び」誕生に関わった三澤正彦らの発言でも明らかになっている。
- 4) E・W・アイスナー『美術教育と子どもの知的発達』黎明書房1986年
- 5) 文部省『小学校学習指導要領解説 図画工作編』1999年P73
- 6) 大久保英治が、2000年から2004年にかけて、ドイツの森、ネダーンホフで手がけた作品で、内から外へ森の中の1年ごとの時の移ろいが表現されている。
- 7) 大久保英治が、ドイツ・コトブスでの展覧会で発表した作品。写真には写っていないが、手前には高い煙突があり、黒く見える土の部分は、チャコールで表現されている。手前から、地、水、火、風、空の基本図形が形づくられ、地中から産出されるチャコールが、燃えて煙となり空へ、そして、また大地へ環流することが表現されている。